

病む晩夏光

戸谷重子

手術後の吾娘^{あこ}に心を残し来て昨日と同じ夕まぐれゆく

亡き夫のあらばと思^もひぬわれを襲ふ娘の戒名娘の遺影

逝きましし人も詠みたる無菌室入りゆく吾娘を長く見つめつ

病室の二十八歳のバースデー婚約指輪を娘は授かれり

副作用に耐へて迎へし誕生日かつらの似合ふ娘を祝ひ合ふ

バンドナの裾の髪の毛替へをりぬベッドの娘の楽しげにして

健康な娘と変はらざる笑顔にて頭部のバンドナ風よ飛ばすな

許可されし外泊惜しむひとときのポーズ浴衣もかつらも似合ふ

発病を知らずに人は祝ひ述べ婚礼家具のチラシ置きゆく

お互ひにあと幾年を生きむかと娘と話しぬき病む晩夏光